

思い出を味わいながら

秋のある日。近所の庭先

で老いた猫が身体を丸くして寝ているのが目に入った。

近所の人たちが餌や水をやつてきた野良猫で、20歳以上であることは間違いないらしい。思わず立ちどまつたのは、その寝顔があまりにも柔軟で幸せそうに見えたからだ。いい夢でも見ていた

駆り立てられた。

もしそんな風に死を迎えるなら、まどろむ前に、

好きな音楽を耳にしながら、好きな作家の本を読んでいい

たい。真っ先に思い浮かんだのは金子光晴。大学時代

に読んだ『どくろ杯』は、自分の生き方を搖さぶった

衝撃の一冊だった。妻三代と魔都上海を、地をはう

代と彷徨つた流転の旅を綴つたこの書は、私を放浪の魔力へと誘つた。いきづ

まつたら旅に出ればいい、それを知つたとき、自分の生きかたが変わつた。放浪

に憧れた末に、海外のサーカスを呼ぶ、やくざな仕事についたのかもしれない。

この『どくろ杯』のあと、金子は『ねむれ巴里』と『西

ひがし』の2冊に、パリ、そして日本に帰る前に立ち

いるのだろうか、ときおり微笑んでいるようにも見えた。自分もあんな風に最期を迎えた、夢うつつまどろみながら、昔の美しい思い出をひとつひとつ記憶の引き出しからとりだし、それを味わいながら、静かに

この世を去れたらどんなにいいだろう、そんな思いに

最後の読書 大島幹雄



この3部作を永遠の眠りにつく前に、読みるのは無理だろう。やはり詩にしよう。それも若き金子が書いた絢爛たる象徴詩ではなく、放浪のあと人生の非情を歌つた詩でもない、彼の詩としてはまつたく異質といえ

る、孫娘若葉を愛でつくした『若葉のうた』がいい。「森

の若葉よ 小さなまごむすめ 生れたからはのびずばなるまい」と孫への惜しみ

ない愛を吐露したあの詩編のひとつひとつをかみしめたい。

若葉のような幼年時代の自分のことを、若葉の季節ともいえる青春時代の友や初恋の人のことを、そして妻と出会い、生まれたふたりの娘と過ごしたひとときを思い出しながら、まどろみ、眠りにつきたいものである。

あの老猫は1カ月後静かに眠るように死んでいった。あれからずっと夢を見続けていたのだろうか。

おおしま・みきお 1953年生まれ。サーカスプロデューサー。「サーカス学」誕生など。